

氏 名	木 村 公 一		
学 位 の 種 類	博 士 (商 学)		
学 位 記 番 号	第 4754 号		
学位授与年月日	平成 17 年 9 月 29 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者		
学 位 論 文 名	旧仏領アフリカ諸国の通貨制度と金融関係 CFA フランの構造とコートディボワールに対する植民地制度の影響		
論文審査委員	主査 教 授 片 岡 尹	副査 教 授 西 倉 高 明	
	副査 教 授 清 田 匡		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、旧フランス領アフリカ諸国の金融的な特殊性についての分析を行うことを目的としている。特に、同諸国に今も残る旧宗主国フランスの影響についての検証を、中心的な議題としている。具体的な検証対象は、植民地時代の通貨制度の影響を色濃く残しながら現在も存続している CFA フランの機能と、当該諸国の中で最大の経済規模を誇る、西アフリカのコートディボワールの産業金融構造に残る植民地時代の影響の 2 点である。単なる途上国一般論としてではなく、フランス領アフリカ独自の問題点を明確化することが主眼である。

本論文は、序章と終章を含めて 8 章構成となっている。第 1 章の「植民地通貨を起源とする CFA フラン」においては、CFA フランについての概要説明を行っている。

第 2 章の「CFA フランにおける「操作勘定」の導入」では、「操作勘定」の導入によって、CFA フランの制度的骨格が成立したことを分析している。第 2 次世界大戦後、フランス本国と植民地との為替整備を再編する一環として、植民地の対外流動性をフランスに集中させる「操作勘定」が導入されることになった。また、「操作勘定」への集中が、フランス本国の対外流動性不足の改善させる効果をもたらした。

第 3 章の「CFA フランにおける制度改革」では、1973 年の CFA フランの制度改革の分析を行っている。植民地通貨的な制度を改革し、アフリカ人による運営と「操作勘定」への集中が緩和された。結果、同諸国はフランスフラン以外の対外債務を増加させる結果となった。

第 4 章の「企業形態に見る独立後のコートディボワール産業の特徴」では、コートディボワールの企業を資本及び経営形態を基準に産業を分析する。農業関連部門を政府資本中心、近代的工業部門におけるインフラ関係をフランス系資本中心、近代的工業部門における製造業を非フランス系資本中心という産業部門ごとの棲み分け構造が存在していたことが明らかにしている。

第 5 章の企業形態に見るコートディボワールの金融機関の特徴と同国企業の金融関係」では、コートディボワールの金融構造の分析に焦点をあてている。政府系金融機関は農業関連部門に対して資金供給を行い、外国資本系近代的工業部門に対して資金供給を行うという、産業同様の棲み分けが成立していた。1970 年代後半に、同国は農産物輸出によって経済が拡大するが、門が資金循環上関連付けられていなかったため、工業化への離陸に失敗している。

第 6 章の「コートディボワールにおける対外債務問題」では、国際資本移動に目を向け、コートディボワールの対外債務構造を分析する。産業金融構造の結果、近代的工業部門が経済拡大期に、海外資金を直接取り入れていき、対外債務が肥大化した。非政府であるためデフォルトができず、通貨に自由交換性が保証されていたため資金流出を止めることができなかった。

終章の「支援制度としての CFA フラン」においては、本論文の結びに変えてフランスがアフリカ諸国独立後

も存続させた植民地制度の、改善すべき点について検証している。CFA フランを例に、植民地制度を現代的な途上国支援制度への改善するため、同通貨の特徴である「完全固定相場による自由交換性」の放棄を提言している。

論文審査の結果の要旨

本論文は西アフリカの通貨である CFA フランを、通貨制度として分析し、評価することを目的としている。CFA フランは、その第 1 の特質として、大戦後より西アフリカ数カ国にわたって流通する地域的共通通貨であり、この意味では、ユーロに先立つ経験を有している。第 2 に、CFA フランはフランス・フランと完全な固定相場を維持し、ドル・ペッグ諸国の通貨がドルにペッグする以上に強固にフランス・フランにペッグしている。本論文は、このような CFA フランがどのように生まれ、どのような機構を持ち、どのように運営され、また CFA フラン圏の諸国ことにコートディボワールの経済をどのように支えあるいはどのような効果を与えたか、を分析している。

第 2 章および第 3 章は西アフリカの CFA フランと呼ばれる通貨制度の生成とその国際決済メカニズムを、「操作勘定」を軸に、論じたものである。植民地時代の遺制としてこの地域の金融はフランスの国庫と結びついており、フランス国庫に開設された操作勘定によって完全固定相場を維持したことが、その機構の解明とあわせて、具体的に分析されている。また、CFA フラン制度がフランスと西アフリカの外貨準備の管理において、当初はフランスにとり外貨獲得の、のちにはフランスの負担によるアフリカ諸国への外貨供給という役割をもっていたことを明らかにしており、以上の 2 点で、大きな業績といえることができる。

第 4 章および第 5 章は、コートディボワールを取りあげ、金融構造を産業構造と関連させ、分析している。産業構造は、農業部門、農業機械・肥料等工業部門、電話・鉄道などのインフラ部門、その他サービス部門に 4 分され、それぞれが資本所有形態別の 4 グループ、すなわち公企業、半官半民企業、公的機関、私企業によって担われている。また金融機関も同じく政府系金融機関、半官半民金融機関、公的機関、民間銀行の 4 グループに分かれ、対応した企業グループと取引関係にある。金融機関はそれぞれ異なる資金使途に応じており、使途に対応した資金調達源をもっている。本章は、金融機関が棲み分けをしている実態を明らかにし、従来の研究に見当たらない、ユニークで優れた研究であり、高い評価を与えることができる。

このような金融構造のため、70 年代後半にコートディボワールも農産物輸出をてこに経済成長を遂げるが、農業部門と連携した金融部門は政府系金融機関であり、工業部門への資金供給経路を持たなかったため、経済成長は工業化に結びつかなかった。これは開発金融論からみても、興味深い結論である。

第 6 章は、第 4・5 章の分析を受け、コートディボワールの対外債務の特質を分析している。80 年代の途上国の債務危機は、ことに中南米で顕著であったが、銀行による対政府貸出いわゆるソブリンローンに起因していた。ところがコートディボワールではこれと異なり、対民間銀行貸出が工業化のための資金の流入経路であった。それというのも、工業化のための資金は民間銀行が供給しており、加えて、民間銀行のいくつかは外銀（仏系銀行）の子会社であり、それゆえに信用度が高く、国際信用を得ることができた。このため対外債務が過大になっても、中南米諸国のようにデフォルトもできず、為替相場も固定かつ通貨の交換性が維持されていたので、外貨が長期にわたって流出し続けた。中南米の債務危機の分析は数多いが、アフリカのそれは少なく、またその違いの指摘は興味深い。

CFA フランの研究は決して多いとはいえない。また、それに関する資料も多くはない。そうした研究条件の中で、利子の動向など残された課題はあるものの、本論文によって CFA フラン制度についてかなり多くのことが明らかになった。加えて、コートディボワールの産業構造と金融構造の関連の分析、およびそれに基づいた債務危機の分析はこの分野の研究に重要な貢献をなしたと評価することができる。審査委員会は博士（商学）の学位の授与に値すると認めた。